

第4学年 ESD 総合的な学習の時間 学習指導案

真美ヶ丘第一小学校 藏前 拓也

1. 単元名

「オリジナル寄席を開こう」～落語で語ろう奈良のいろいろ～

2. 単元の目標

- 伝統的な言語文化である落語の特徴を知るとともに、落語の基本的な構成を理解することができる。

できる。

(知識・技能)

- 声の大きさや話す速さ、間の取り方や表情を工夫して話すことができ、発表者の話に関心をもって聞き、自分の感想や意見を伝え合うことができる。

(思考・判断・表現)

- 落語に親しみ、小話をつくったり、落語について自ら調べたりし、どのように工夫すれば、聞き手に伝わりやすい話になるかを意欲的に考えることができる。

(主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

○教材観

落語は、戦国時代から江戸時代にかけて語りつがれてきた日本独特の伝統芸能であり、庶民の文化である。また、人間の生き生きとした姿や会話、しぐさなど、当時の生活の様子が表現されている。例えば、「なにをいってやんでえー、べらぼうめえー!」という台詞が登場するものがあるが、児童にとっては、言葉の意味はよく分からなくても、「昔の人はこんな風に言って怒っていたんだなあ」などと、当時の様子を想像することができる。また、独特のリズムや間合いで語られる言葉の魅力を味わうことができる。話の中には、子どもや女性やお年寄りなど内容によって、いろいろな人物が登場する。話し手は、いろいろな登場人物を一人で演じ分けるために、表情を変化させたり、声の調子(高低)を変えたりしながら会話を進めていく。そして、聞き手を魅了するためにその役になりきり、身振り手振りをまじえ、扇子や手ぬぐいなどの小道具を使って演じる。このように話がより面白く、そして分かりやすく伝えられように工夫することで、児童の表現力を磨くことができる。また、聞き手の立場から考えると、落語はしっかりと聞いておかないと、落ちが分からない(ピンとこない)ということがあるので、聞く力を高めるのにも有効と言える。さらに、話を聞いて想像力をはたらかせることもできるであろう。そして、話の題材(ネタ)を探す範囲を、自分たちの地域にある身近なものを扱うようにする。そうすることで、地域にある遺産や伝統といった、地域の特徴や文化にも親しむことができる。この単元では、実際に自分がつくった落語(小話)を演じたり友だちの落語を聞いたりする活動を通して、話し方、聞き方のスキルを身に付け、表現力を豊かにすることを目的とする。そして、自分たちでオリジナルの寄席を開くことを目標にして取り組ませたい。

○指導観

第一次の導入には、古典落語「元犬」を紹介する。この落語は、東京都の台東区にある「藏前神社」が舞台となっている。落語の内容は、犬が人間に生まれ変わることを願い、その願いが叶った犬が人間として奉公先で仕えていたが、奇怪な行動が重なり、元々は犬というのがバレてしまうという落ちで展開される。犬を題材に簡単な話の流れで構成されているので、児童たちにも親しみやすいと考える。それに加えて、NHKのTV番組「おはなしのくにクラシック」を視聴する。

番組の中では、扇子や手ぬぐいの使い方、話を展開するときの上下を切る（右を向いたり左を向いたりする）といった基本的な所作について解説されており、落語の歴史などについても分かりやすく紹介されている。また、指導者自らも自作のお手本を見せることで、児童たちが落語の学習を身近に感じ、関心をより高められるようにする。

第二次では、いろいろな落語、とんち話や奈良の昔話などを聞いたり見たりして話をつくる際の材料にし、ある程度落語のイメージをつかんだところで、話の作成を進める。児童が自ら落語の話をつくり出すには、「いつ・どこで・だれが・なにを・どうした」という基本的な話の組立てをしっかりと考え、組立てメモをつくらせる。ここで、自分が使いたい洒落や落ちのパターンも合わせて考えさせておくが、必ずしも洒落で終わる話ばかりでないことも知らせておく。こうして話の大まかな流れを組み立てた後、落語ならではの「まくら（導入部）→本題（展開部）→落ち（終結部）」の構成を意識しながら、話に肉付けをさせていく。どうしても自分で話をつくるのが難しい児童には、支援を行っていく。どんな話にしたいかを児童に聞きながら助言できるように配慮していく。

第三次の話し方の練習では、上下の切り方、表情、目線、声の大きさや抑揚などのチェック項目を予め知らせ、友だちどうしでアドバイスし合う。友だちにアドバイスをするときには、自分が気付いた友だちのよさをしっかりと伝えられるようにしたい。そして、練習を重ねる中で出てきた疑問や悩みに対しては、落語家さんをゲストティーチャーとして招き、助言してもらう機会を設ける。また、聞き手が感想などを述べる際、「面白い・おかしい」という意見で終わるのではなく、「どこ」が面白かったのか、友だちの話し方で「どんなところ」が工夫されていたのかを見つけさせる。具体的に話をさせることで、児童たちの協同的な学び合いが充実するように展開していきたいと考える。まわりの友だちに対して恥ずかしさが芽生える時期ではあるが、落語の小話では思いきった表現で、生き活きとした子どもたちの姿が見られるように指導していきたい。

4. ESDの観点

○育みたい資質・能力：コミュニケーション能力

本単元のゴールになる言語活動として「寄席を開こう」を位置づけた。落語の発表を通して、相手を意識した話し方、聞き方ができる力を養うとともに、話したい材料を選んで表現することができる力を育てられると考える。また、グループで発表練習を行う際の児童同士が活発にアドバイスし合えるように指導していく。他者と交流することで、個人の学習を深める協同的な学びの場面を大切にしたいと考える。

5. 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に取り組む態度
① 落語の歴史や特徴を調べ、話をつくる際に、活用している。 ② 落語の基本的な構成「まくら(始め)→本題(中)→落ち(終わり)」を理解している。	① 聞き手によく分かるように、工夫して話している。 ② 話の構成、発表者の話し方に関心をもって聞き、感想や意見を述べ合っている。	① 落語に興味をもち、親しもうとしている。

6. 単元の指導計画(全10時間)

次	時	主な学習活動	指導上の留意点(・)と評価(△)
一	1 ①	○落語についての学習の見通しをもつ。 ●落語について理解を深める。 「藏前神社」, 「元犬」の紹介 「おはなしのくにクラシック」 ●指導者の落語を聞く。 「こうこう糖☆」(指導者作)	・学習の流れの確認がわかるように学習見通しマップを掲示する。 △ウー①
二	4 ② ③ ④ ⑤	○小話の原稿を書く。 ●地域の題材(ネタ)を考えて選び、決定する。 例: 大仏、鹿、大和茶、世界遺産など ●話したい内容を考えて、メモに書き出す。 ●考えた話をもとに、組立てメモをつくる。 ●組立てメモをもとに小話の原稿を書く。	・話したい落語の構成や落語特有の言葉を調べられるように支援する。 △アー① ・工夫して小話をつくれるように、作り方のモデルを見せる。 △アー②
三	2 ⑥ ⑦	○小話の練習をする。 ●グループで練習をする。 ●ゲストティーチャーから助言を受ける。	・話し方の工夫などをアドバイスさせる。 △イー①②
四	2 ⑧ ⑨ ⑩	○落語の小話会(〇〇寄席)を開く。 ●小話を発表する。質問や意見、感想を述べ合う。	・声の大きさや話す速さ、間の取り方や表情を工夫して話させる。 △イー① ・話の構成、発表者の話し方に関心をもって聞き、感想や意見を伝え合わせる。

			$\triangle 1 - ②$
--	--	--	-------------------